

日本学術会議第1部報告

漢文資料総合学術センターの
設置について（報告）

平成9年6月20日

日本学術会議
第1部

この報告は、第16期日本学術会議東洋学研究連絡委員会の審議結果を取りまとめて、第1部の報告として発表するものである。

第 1 部

部 長	中田 易直	城西大学経済学部招聘教授、中央大学名誉教授
副部長	戸川 芳郎	二松学舎大学大学院文学研究科教授、東京大学名誉教授
幹 事	堀尾 輝久	中央大学文学部教授、東京大学名誉教授
	森岡 清美	淑徳大学社会学部教授、東京教育大学名誉教授、成城大学名誉教授
会 員	上里 一郎	早稲田大学人間科学部教授
	朝倉 剛	(東京外国語大学名誉教授、獨協大学名誉教授)
	石川 忠久	二松学舎大学大学院文学研究科長、桜美林大学名誉教授
	板垣 雄三	東京経済大学コミュニケーション学部長、東京大学名誉教授
	市倉 宏祐	(専修大学名誉教授)
	岩崎 卓也	東京家政学院大学人文学部教授
	上田 閑照	花園大学客員教授、京都大学名誉教授
	大山 正	日本大学文理学部教授
	鹿取 廣人	帝京大学文学部教授、東京大学名誉教授
	久保 正彰	東北芸術工科大学学長、東京大学名誉教授、日本学士院会員
	末尾 至行	関西大学文学部教授
	高嶋 正人	(立正大学名誉教授)
	高橋 康也	昭和女子大学大学院文学研究科教授、東京大学名誉教授
	辰野 千壽	財団法人応用教育研究所所長、筑波大学名誉教授、上越教育大学名誉教授
	徳川 宗賢	学習院大学文学部教授、大阪大学名誉教授
所 理	喜夫	駒沢大学文学部教授
	中塚 明	(奈良女子大学名誉教授)
	中野 光	中央大学文学部教授
	仲村 優一	淑徳大学社会学部教授、日本社会事業大学名誉教授
	前田 惠學	愛知学院大学文学部教授・大学院文学研究科教授
	松井 透	川村学園女子大学文学部教授、東京大学名誉教授
	真野 宮雄	日本赤十字看護大学看護学部教授、筑波大学名誉教授
	宮下 充正	東洋英和女学院大学人間科学部教授、東京大学名誉教授
	吉田 民人	中央大学文学部教授、東京大学名誉教授
	米山 俊直	大手前女子大学学長、京都大学名誉教授
	渡邊 二郎	放送大学教養学部教授、東京大学名誉教授
	綿貫 讓治	上智大学外国語学部教授

東洋学研究連絡委員会

委員長	松井 透	日本学術会議第1部会員，川村学園女子大学文学部教授
幹事	戸川 芳郎	日本学術会議第1部副部長，二松学舎大学大学院文学研究科教授
	奥村 郁三	関西大学法学部教授
	高崎 直道	鶴見大学学長
委員	石川 忠久	日本学術会議第1部会員，二松学舎大学大学院文学研究科長
	有賀 祥隆	東北大学文学部教授
	池端 雪浦	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
	石井 米雄	神田外語大学学長
	神田 信夫	(明治大学名誉教授)
	後藤 明	東京大学東洋文化研究所教授
	斯波 義信	国際基督教大学教養学部教授
	未成 道男	東京大学東洋文化研究所教授
	松谷 敏雄	東京大学東洋文化研究所教授
	御牧 克己	京都大学文学部教授
	山田 辰雄	慶應義塾大学法学部教授

漢文資料総合学術センターの設置について（報告）（要約）

本報告は、第15期東洋学研究連絡委員会によって提起され、第15期、第16期を通じて第1部において検討を重ねてきた構想をその内容とする。

“漢字・漢文資料”の調査・保存とその公開ならびにその研究を進めるために、専門学藝員（archivist）の養成機能を兼ねそなえた「総合学術センター」の設置を要望するものである。

前文において、日本文化の形成に対してはもとより、国際メディアとして作用しつづけた漢字・漢文資料の保存・利用の危機的現況について述べているが、その難局を打開する応急の方策として、個別の研究所・図書館で行う努力は、すでに限界に達して久しい。

ここで構想される「総合学術センター」においては、

- I. 資料確保を基本とする漢語語彙集成の編纂仕事を公的事業として実施する。これは世紀にまたがる事業を行っている西洋古典語の編刊に匹敵する。
- II. うえの工作与表裏する事業として、漢字・漢文資料を取扱い、読解し整理しうる専門学藝員（archivist）を養成する研修機関を附設する。

以上の二大事業を継続させるため、国の内外からの専門研究者が随時流動的に配備されることとなる。

なお、この構想のために、2回にわたるシンポジウム「21世紀を迎える漢字文明」（H 8. 4. 10 東洋学研究連絡委員会主催、H 9. 2. 6 語学・文学研究連絡委員会主催）を開いている。

以上

漢文資料総合学術センターの 設置について（報告）

日本の国際貢献が地球規模で問われている現在、人類最大の文化遺産のひとつであり現在も使われている国際メディアとしての“漢字・漢文資料”の継承とその総合的研究を長期的見通しをもって行うこと、同時にその面における日本の歴史的文化的所産を正当に評価・継承し、また批判・発展させること、さらに広く世界に向けてそれらの成果を紹介すること、これこそわれわれ人文・社会科学に携わる研究者の任務とするところと考える。

そもそも日本文化を考えると、大陸アジア、なかんずく中国との交流—漢字文化の渡来—の影響には、測り知れないものがある。わが国の文字・言語の発達をみるだけでも、そのことは明らかであろう。事情は、おなじ位置にあるアジア諸国についても共通している。このアジアの漢字文化圏を視野に入れつつ、現存する漢字・漢文資料の調査・保存とその公開ならびにその研究を進めることは、国際化のはげしい波の中で、それらの資料の現状を顧みるとき、まことに緊急な課題と言わなければならない。

つとに国語国文学の分野においては、わが国固有の言語・文学の史的所産について、その総合資料センターとしての国立大学共同利用施設「国文学研究資料館」が設置され、「近代日本文学館」と併せて、国語国文学資料に関する総合的な調査・収集・保存の事業が実施され、ひろく国内外の各研究分野の需要に応じて門戸を開き、活発な利用がなされている。

しかしながら、これらの研究資料センターには、重大な空白部分が残されたままである。すなわち日本文化の一半を支えてきた多様かつ膨大な資料群—漢字・漢文資料—が放置されていること、これである。

わが国に存する漢字・漢文資料とは、

1. かつて中国文化—思想・文芸から政経・法制におよぶ—を受容するために将来された漢籍・仏典全般を指す。それは、日本列島に発達した言語・文化とそこに形成された社会・制度に対して甚大な影響を与えずにおこなったその源泉をなす文献群である。つまり、中国大陸・朝鮮半島からもたらされた漢字・漢文資料を指す。

2. それとともに、その漢字・漢文資料に習熟したわが国知識人の漢字漢語を用いての、広汎な内容にわたる著作を指す。古くは金石・木簡などにとどめる漢字語から、公私の政事記録や日記類、そして、さまざまな文芸・思想作品や宗教的著述、さらに準漢籍とよばれる漢文による漢籍の注釈類におよぶ文献類が、無数に蓄積されており、それらは文書・書画や版刻・金石のかたちをとって伝えられているものである。

現在、これらの漢字・漢文資料群が放置に近い状態にあることについては、二、三の重要な原因が数えられる。

すなわち近代日本のアカデミズムの成立と日本ナショナリズムの形成との絡み合いの中で、欧米の学術研究方法を移入するに急なあまり、東洋古来の学問的伝統が軽視されたこと、日本研究の諸分野—国史・国語国文などにおいて、ややもすれば漢字・漢文資料を敬遠する処遇がつついたこと、などである。

そして、漢学・漢文学の名称をとる分野の研究自体にも大きく変化がおり、漸次その源流としての中国文化の研究、つまり中国学へと移行してゆき、ことに戦後は挙げて中国文学・中国思想の研究へと研究体制そのものが変貌を遂げたこと。漢字・漢文資料は、そのはざまに在って、ごく少数の篤志家によって辛くも保護されてきたと言っても過言ではないのである。

漢字・漢文資料を扱う研究分野は、しかしながら中国学プロパーは言うまでもなく、日本史・国語国文・日本思想（倫理学）・仏教（印度哲学・宗教学）・美術史をはじめ法制・外交・経済から、近時脚光をあびている医薬・工芸・農業技術等の多方面におよんでいる。かかる広汎な研究分野からの漢字・漢文資料への切実な需要が存するにもかかわらず、その資料を対象とする専門の学術研究機関が存在しないため、資料自体の取り扱いが、まことに憂慮すべき状態におかれている。

漢字・漢文資料を対象とする専門研究者についても、戦後わが国の学術・文化を担当すべき責任ある機関において、一貫して無反省のまま、その養成を怠ってきた。

わが国における歴史的文化的所産をかえりみて、この漢字・漢文資料の放置および専門研究者の欠如は、いまや日本文化研究の正常な推進を妨げる重大な要因となっている。

他方、国際的視野に立つとき、わが国の漢字・漢文資料の利用は、なお最高の水準を保っている。ひろく欧米地域にもまたがって伝統のある東洋学について、その現状を顧みる

とき、とりわけ東アジアの現代研究を重視する傾向のなかにあつて、かえつて中国を中心とした歴史的文化的研究への関心が低下の一途を辿りつつある。当の中国においても、簡体字の普及などの事情から、伝統的な漢字・漢文資料の利用能力をもつ研究者層に偏りが見られ、同様に、かつて漢文資料による研究水準を誇つた朝鮮半島やベトナムにおいて、国語表現にハングルやラテン文字を使用しその拡大にともない、それらの資料を利用する技能は減退し、いよいよ研究者層を希薄にしている。

この現状にかんがみその危機を打開するためには、わが国にあつては、まず全国のあらゆる種類の漢字・漢文資料の所在状況を確認し、その調査・収集・保存の工作をその緊急事業として興さなければならない。それと同時に、これら各資料を取り扱う専門研究者を養成することこそ緊要の課題となっている。

そしてこれら、漢字・漢文資料の利用能力の維持と将来への発展のために、われわれの果たすべき役割は、資料の全面的整備と専門研究者の養成において、ひとりわが国の学問研究におけるのみならず、国際的にみてもまことに重要であると言わなければならない。

以上の目的のために、少なくとも現「国文学研究資料館」「歴史民俗学博物館」の事業と機能を併せた規模の大学共同利用研究機関を設置し、各種研究分野からの需要に応えなければならない。それを通じて、日本文化のさまざまな資産を国内はもとより、国際貢献に堪えうるかたちで提供する必要がある。

1. 緊急に設置する必要性

漢字・漢文資料の収集と保存については、全国的にみて、漢籍—中国渡来の唐本・朝鮮本・和刻本や写本—および日本人による記録類、漢籍・仏典に加えられた音義・注釈資料などを収蔵する機関は、公私にわたつて少なからず存在するが、現在、その図書整理・目録作成といった基本作業をふくめ、全般的に漢字・漢文資料の管理・利用には大きい欠陥がみとめられる。

すなわち、

1. 漢籍に関する図書館学的専門知識と整理技術を有する専門職員が、絶対的に不足し

ている。

たとえば、東大附属図書館は豊富な漢字・漢文資料を蔵する機関のひとつであるが、その資料整理に十余年を費やして、近年ようやく、その一部が「目録」として刊行された。この長い年月にわたった情報化（目録作成）の作業には、漢文読解の能力ならびに書誌的知識を習得するのに必要な期間がふくまれているのである。漢字・漢文資料整理の方法が系統的総合的に準備されていなかったことが主要な理由である。

これに類似の事からは、現今の漢籍を保有する図書館の共通の悩みである。

2. また、一層深刻な事態として、出版資料をはじめ、金石・書画・文書等の漢字・漢文資料が、読解・解説のないまま放置され、散逸の恐れが十分考えられる。

ことに、地方史や美術史の研究分野からの要求に応じうる専門職は、皆無に等しい。たとえば地方における公共図書館（大学をもふくむ）にこれらの資料が保存されているとき、それらはおおむね図書館職員の整理・公開能力を越えるものである場合がほとんどであり、まして私的レベルでの資料（寄託資料・放置された個人所有の資料等）においては、売却による散逸、あるいは焼却廃棄される危険すら、多々あるのが現状である。琉球諸島に散在するいわゆる沖縄文書のごとき、まさにこの状態にさらされている。

これらの資料を収集し、さらにまた情報技術の進歩に即応したファイルに収めて整理公開するための設備、ならびにその技能を身につけた人員が早急に必要である。

3. また、江戸期文化は近代化の土壌として各種の成果をいまに伝えるが、漢文学もまた国文著作を凌駕するほどに高揚し、思想・宗教・文芸などの幾多の漢文作品を産んでいる。それらの再評価が注目される現在、その最大の隘路は、当時発達した訓法（訓読）をふくめ、漢文読解の技能を習得した専門家に欠けていることである。

たとえば、「江戸詩人」著作選を刊行する本邦の代表的出版社ですら、その注解担当者に事欠く実情である。

4. 如上の漢字・漢文資料を調査・整理する専門職、ならびに漢字・漢文資料を読解する技能を有する人材が、全国的に払底している。現今の大学・研究機関では、漢字・漢文資料を取り扱うための書誌的方法を系統的・持続的に教授する学科課程はほとんどなく、また伝統的な漢文訓読の方法技術を正確に習得せしめる学科課程も消滅の一途を辿ってい

る。そのため、中国研究に従事する若干の有志が、この漢字・漢文資料の整理・読解・解説を補助しているのが現状である。

5. そもそも漢字・漢文資料の取扱いに特徴的なこととして、わが国において、この読解にともない、古代から近代におよぶまで長期にわたって独特の訓法をつくりだす一方、日本語表記に漢字・漢語を十分活用したことが挙げられる。いわゆる漢文訓読によって、漢字漢語資料の読解をすすめる一方、日本語じたいに漢語のもつ造語力と論理性を導入し、日本語の表現を豊かにしてきた。

いま、この漢字・漢文資料の読解に当たっては、伝統的な訓法—漢文訓読による読解方法—を十分にマスターせしむべき研究者の出現が、焦眉の急務と考えられる。このための訓読技術に語法的文献学的な検討を加え、より合理的で簡便な訓読法を案出し、それを伝授していく研修機関を準備しなければならない。

漢文訓読がこれらの資料を読解するに際しての便宜的な技法であること、それは漢字漢語の語構成・文章法を理解する捷徑であり、この点、他の方法をもって替えがたい優れた点である。この訓法に、漢語のもつ音韻・語彙の諸特徴を補足することによって、従来の固陋なイメージを払拭しうるものであり、この簡便な方法を利して、日本語以外の話し手たち、たとえば朝鮮半島やベトナムのほか、欧米の非漢字系国の漢字・漢文資料研究者にも福音をもたらすことは、確実である。

6. また、全国的な漢字・漢文資料の保存・整理・公開のための人材を育成する機関も、同時に準備されるべきである。現在、東大東洋文化研究所・京大人文学研究所の「東洋学文献センター」において定期的に図書館職員むけの漢籍整理研修が実施されており、これまでの成果にかんがみても今後とも継続されることが望ましいが、一方全国の図書館職員をすべてここに結集することには、それぞれの組織における予算・人員の問題等に関して無理があること、また、現在の図書館職員の勤務態勢にあっては、漢文資料を扱う専門技能者が他の部署への配置転換を余儀なくされる場合も考えられ、その習得した技能を永続的に維持しつづけることに困難があること等、組織や機構の点でも重大な問題が残されている。

しかもこれのみでは、さきに述べた最も散逸の危険性をはらむ沖縄文書、はたまた私的レベルでの資料に対する手当てが次如せざるをえない。とすれば、これらの資料に関心を

持って積極的に整理・保存・公開に尽力する個々の専門家を育成・派遣しうる、ならびにこれらの資料の譲渡・購入にも耐えうる、本格的な施設がぜひとも必要である。

7. 上に述べたような漢字・漢文資料に関する現状は、ただ国内のみならず、今や国外においてもまったく同様であり、それらを整理・保存・公開するための現地の専門家の育成が急務である。これらの専門家育成は、わが国の負うべき文化的事業であり、世界に向けて果たしうる国際貢献である。

8. 現今、この難局を打破せんがための緊急迅速な対策として、漢字漢語と漢字・漢文資料に習熟した専門家を養成する任務を負った、以下の事業と機構を備える「漢文資料総合学術センター」の設置を切望する。

ちなみに「国文学研究資料館」「近代日本文学館」は、文学方面に限定されており、漢字・漢文資料は、はるかにその範囲を超え、政治・宗教・医薬・工芸にもおよぶ内容であって、これとは独立の専門資料を扱う機関として設置されなければならない。

また東大東洋文化研究所・京大人文学研究所の「東洋学文献センター」は、中国書に限らず、日本学関係を除外したアジア全域をカバーするものであるが、本「総合学術センター」が取り扱う日本を中心とする漢字・漢文資料の大部分はその域外におかれている。

かくして、本「総合学術センター」は、独自の資料を調査・研究する学際性ゆたかな学術機関として、またすでに述べた緊急の課題と役割を担う国際的な研修機関として、上記の各資料館ならびに研究所とは独立したかたちで設置されるべきものであり、その存在意義は極めて高いものといわなければならない。

II. 漢文資料総合学術センターの事業と機構

1. 事業

- (1) 日本および国外における漢字・漢文資料の所在調査とその資料収集を行う。
- (2) 漢字・漢文資料の整理と情報化の作業ならびにその閲覧業務を行う。
- (3) 各種研究に資するための漢字・漢文資料の複製・刊行及び研究情報の提供を行う。

(4) 国内・国外の専門研究者を結集して、漢字・漢文資料を資材とする人文・社会科学や自然科学の諸分野にわたり、通時的・共時的に各種の学際的研究プロジェクトを企画・立案し、研究する。

研究プロジェクトとなる対象は、

- ① 日本古代の漢字・漢文資料（六国史・律令等の国史資料・公家日記等）
 - ② 日本中世の漢字・漢文資料（五山文学・禅語録等）
 - ③ 日本近世の漢字・漢文資料（江戸儒学・漢文学等）
 - ④ 日本近代の漢字・漢文および漢語資料（近代漢語・語彙史等）
 - ⑤ 沖縄の漢字・漢文資料（家譜・政事記録等）
 - ⑥ 漢籍の日本受容史等に関する資料（古佚書等 準漢籍を含む）
 - ⑦ 漢訳仏典を主とする宗教資料（注釈書・漢文による著述を含む）
 - ⑧ 金石・木簡・書画等に関する漢字・漢文資料（美術・工芸を含む）
 - ⑨ 科学技術に関する漢字・漢文資料（医薬・博物・土木・算学等）
 - ⑩ 訓法（訓点・訓読）に関する漢字・漢文資料
 - ⑪ 朝鮮半島・ベトナムその他の漢字・漢文資料
- である。

(5) 漢字・漢文資料の読解技術に習熟した、国内・国外の専門家を養成するための、講義・演習を開講する。

- (6) 漢籍に関する図書館学的専門知識と整理技術に習熟した、国内・国外の専門家を養成するための、講義・演習を開講する。
- (7) 国内・国外の大学・研究機関等との共同研究を実施する。
- (8) 漢字文化圏に限らず、世界規模にわたって国際交流を推進する。

2. 機構

本「総合学術センター」の事業を遂行するために、次の3部9室を置く。

(1) 企画研究部

1. 企画研究室

漢字・漢文資料を資材とする人文・社会科学や自然科学の諸分野にわたる各種の学際的研究プロジェクトを企画・立案し、研究する。

2. 編集室

漢文資料の調査整理用マニュアルの作成、漢文読解テキストならびに学習・便覧辞書の編集を行う。

(2) 情報部

3. 資料調査室

文献・金石等の漢字・漢文資料を網羅する全国的な所在調査・情報確認と記録・収集・整理を実施する。あわせて国外における漢字漢語関係資料の所在調査・資料収集を行う。

4. 研究情報室

各種研究の需要に応えるための情報化（目録情報のデータベース化・資料の画像データ化）および索引類の編纂を実施し、各種研究の学術情報を準備する。

5. 資料閲覧室

記録・収集された漢字・漢文資料の保管および閲覧・情報公開の業務を行う。あわせて資料の複製・刊行を実施する。

(3) 研修部

国内・国外の大学・研究機関等から委託生を募集し、研修にあたる。

当部には、「国際交流セミナーハウス」を研修用・宿舎用の施設として附設し、その管理・運営にあたる。

6. 第一指導室

漢字・漢文資料に関する古文書学的知識の指導を行う。

7. 第二指導室

漢文資料の読解技術に関する指導を行う。

8. 第三指導室

漢籍の図書館学的知識とその整理に関する指導を行う。

9. 交流室

国内・国外の研究者・研究機関との共同研究を計画し実施する。および学术交流による研究者の受け入れを行う。

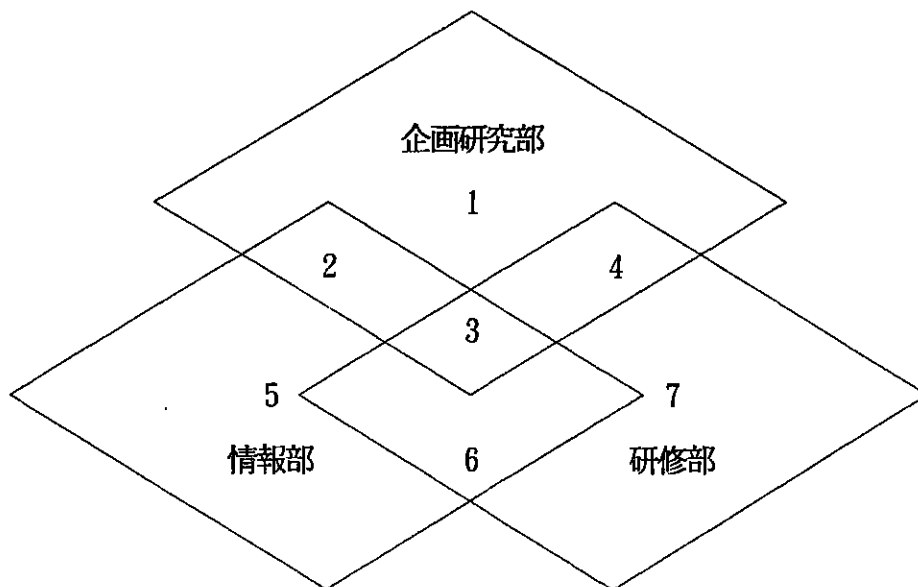
機 能 図

各部関係機能とその構造について

本センターにおいては、3部9室の役割がそれぞれ分離してその任務を担当するのではなく、相互に関連しあう構造を持って任務を遂行する。

本センターは、情報部と研修部とを二本の柱とするが、その両者を統括し、運営する総理機能を持つことが必要である。と同時に本センターの目的にかなう独自の研究活動を備えることも必要である。その機能を担うのが企画研究部である。

ここには企画研究室と編集室をおくが、そこでは定期的に管理部門から正副センター長が、また情報部・研修部に所属する研究員が参集して、両部における長期かつ計画的な事業方針と当面の活動方針を検討・推進すると同時に、外部機関との連携を計りつつ各種の研究プロジェクトを企画立案する。また独自の研究活動をも並行して実施する。そして全国的ひいては国際的なプロジェクト計画を実行・推進することになる。したがって企画研究部は各種プロジェクトの発動とともに、本センターのメンバーを含む内外の研究者が随時流動的に配備され、機能することとなる。



1. 各種研究プロジェクトの企画・立案ならびに研究、その援助・推進。
2. 調査・整理の企画・立案、善本資料の研究、各種一般資料の研究、歴史文化研究等。

3. 漢文資料マニュアルの作成。
4. 研修の企画・立案、漢文読解テキストの作成、漢文読解辞書の作成。
5. 資料の調査・収集・整理、目録作成、公開閲覧。
6. 資料の調査・整理の実習。
7. 漢文読解研修、資料の調査・整理の研修。

本センターに常設される研究部門は、情報部および研修部に所属する複数の研究員による各種プロジェクトへの参画と、それぞれの部局独自の研究活動によって保障される。したがって企画研究部は本来は情報部・研修部の日常的事業を統括し、情報活動・研修活動との密接な関係において機能するものである。

機 構 図

